連載

インテリジェンスの今を読み解く 31

情報に弱い日本型組織からの脱却を！

仮野忠男

中川十郎・日本ビジネスインテリジェンス協会会長に聞く(上)

日本人商社マンに衝撃を与えたコーヘン氏著の1冊の本

東西冷戦が終結し、国際市場競争の激化が進む中で、それまで軍事面で使われてきたインテリジェンスの手法を、ビジネスに活用しようという「ビジネスインテリジェンス」の研究が世界的にますます盛んになっている。

米国では1986年から、CIA(中央情報局)出身の情報専門家や学者、実業家などが参加する「競争情報専門家協会(SCIP=Society of Competitive Intelligence Professionals)」が活動を続けている。

一方、日本国内では92年2月に「日本ビジネスインテリジェンス協会(BIS=Business Intelligence Society of Japan)」が発足し、これまでの18年間、研究活動を積み重ねてきている。

今回は、同協会の設立に尽力し、当初から会長を務めている中川十郎さん(前東京経済大学経営学部教授・同大学院教授)に、ビジネスインテリジェンス研究の意義や今後の課題などを聞いた。

＊　＊　＊

―― 中川さんがビジネスインテリジェンス問題にかかわりを持つようになったのは、どういうきっかけがあったんですか。

中川　米国ニチメン・ニューヨーク本店の開発部長をしていた88年夏、ニューヨークJETRO(ジェトロ)から『ノースイースト・トレードレビュー』という貿易雑誌のインタビューを受けてほしいという要請がありました。「日本が米国に期待しているハイテク製品は何か」といった質問があり、私は「日本の総合商社は100年以上の歴史を持ち、世界の約100カ国に及ぶ海外ネットワークを通じて2万点以上の商品を扱っている。年商は数兆円に上る。日本特有の企業であり、これを米国がまねしようとしても一朝一夕にはできないだろう」「ニチメンは、ハイテク分野ではボストンで開発された人工知能のソフトを日本に紹介している。商社はモノを扱うだけじゃない。情報化時代だから、そういうソフトも扱っている」などと話しました。

この記事を見たSRA社(ワシントン)のコーヘン開発担当部長が「さらに詳しい話を聞きたい」と来社しました。夕食を一緒に取りながら意見交換をしているうち、コーヘン氏が鞄から『REAL・WORLD INTELLIGENCE』(ハーバート・マイヤー著)を取り出したんです。

この当時、私はインテリジェンスとは何かよく知らなかったことから「インフォメーションのことではないのか」と尋ねました。すると、コーヘン氏は「そうではない。インテリジェンスとは情報を分析し、加工し、企業経営に役立つように付加価値を高めたものだ」と説明してくれました。本の内容はコンペティティブインテリジェンス(競争情報)やビジネスインテリジェ

ンスを系統的かつ理論的に説明したものであり、興味をそそられました。「日本に紹介したい」と考え、コーヘン氏を通じて著者の了解を取りつけ、1年間をかけて翻訳に取り組みました(注1)。

「相手に与えても減らない、むしろ増えるもの」それが「情報」

―― この本を通じてビジネスインテリジェンスという言葉が、日本に初お目見えしたわけですね。

中川　そうです。その後、89年1月にはニューヨークで開催されたSCIPの会議で「日本総合商社の米国における情報収集とその活用」という題で講演しました。同じスピーカーとして出席していたベンジャミン・ギラード博士(ラトガース大学大学院助教授＝当時)と知り合い、博士の著書『The Business Intelligence System』の日本での翻訳・出版を引き受けるということもありました(注2)。

―― 90年10月にはパリで開かれた国際情報会議に出席されたそうですね。

中川十郎氏　(なかがわ・じゅうろう)　1935年鹿児島県生まれ。59年東京外国語大学を卒業後、日綿実業(その後、ニチメン。現双日)に入社。66年のバグダッドを皮切りに米国での6年間を含めて20年間、海外駐在員を務めた。訪問した国は60カ国以上にのぼる。92年3月に退職した後、愛知学院大学商学部教授、東京経済大学経営学部教授・同大学院教授などを歴任。現在は日本大学大学院グローバルビジネス研究科兼任講師などを務めている。この間の92年2月、日本ビジネスインテリジェンス協会の会長に就任し、現在に至る。共訳書に『CIA流戦略情報読本』『グローバル企業の情報組織戦略』『成功企業のIT戦略』、編著書に『知識情報戦略』など。

中川　マイヤー氏から講演要請があり、私は「情報というものは商品と違い、相手に与えても減るものではない。逆に与えることによって相手からも情報が得られる。つまり情報は増加する特性を持っている。情報が欲しいと思ったら、与えることが大事だ」といった話をしました。その意味はこういうことです。私が100の情報を持っているとします。そのうち10を相手に与えたとしても90に減るわけではありません。100のままです。逆に相手は「申し訳ない」と思い、5の情報を私にくれるかもしれません。そうすると私の情報量は105に増えるわけです。

―― その会場でビジネスインテリジェンス研究の大家であるスウェーデン・ルンド大学大学院教授のステバン・デディジェール博士と知り合いになり、そのことが、中川さんがビジネスインテリジェンス研究に本格的に取り組む契機になったそうですね。この点は次回、伺いましょう。

【注1】著者のマイヤー氏は『フォーチュン』誌の副編集長、米国中央情報局(CIA)長官特別補佐官、国家情報評議会副議長を歴任した人物。中川さんは、友人の米田健二さんと手分けして翻訳し、日本では90年9月、『CIA流戦略情報読本――リアル＝ワールド・インテリジェンスの世界』としてダイヤモンド社から出版された。

【注2】日本語のタイトルは『グローバル企業の情報組織戦略』。共訳でエルコ社から96年11月に出版された。

仮野忠男(かの・ただお)
政治ジャーナリスト、前徳島文理大学総合政策学部教授。1945年2月生まれ。毎日新聞社で政治担当論説委員などを歴任。2001年退社。防衛省、外務省の取材経験が長く、防衛省の入札談合再発防止検討会特別委員、外務省の海外交流審議会委員などを務めた。